

■江原素六とその周辺61

幕府海軍士官鈴木録之助と昌光丸沈没事件

■館外展示のお知らせ

■催しもの参加者募集

■江原学習作品展～子どもたちが見た江原素六～開催中

二〇二一年七月

史料館通信 沼津市明治

通巻146号



日本海員掖済会通常會員証

明治34年（1901）

（当館蔵）

日本海員掖済会は明治13年（1880）8月、イギリスのセーラーズ・ホームをモデルにして設立された海員のための福祉団体であり、宿泊所提供・教育訓練・医療福祉・遺族保護などの事業を行った。現在は公益社団法人になっている。この資料の当時、総裁は有栖川宮威仁親王（海軍少将）、会長は赤松則良（海軍中将）。同会設立にあたっては海軍・海運関係者等54名が発起人となったが、赤松のほか、矢田堀鴻・塚本明毅・伴鉄太郎・山本淑儀・中村六三郎・松山温徳ら少なからぬ沼津兵学校関係者が含まれた。ほかに発起人には、浜口英幹・荒井郁之助・沢太郎左衛門・小笠原賢蔵・五藤国幹・福井光利・徳田幾雄・本山漸・新井保之助・森田盛嗣・蛭子末次郎・古川庄八ら、長崎海軍伝習所・軍艦操練所で学び、箱館戦争に参戦した者などが名を連ね、明治の海軍・海事分野における旧幕臣・幕府海軍出身者の存在感の大きさを示している。なお、沼津兵学校関係者では、赤松が委員長・会長・理事・常議員、中村が主幹・理事・常議員、松山が理事・委員・常議員、伴・塚本・矢田堀・山本が委員、田口卯吉が常議員をつとめた。

〔参考文献〕『日本海員掖済会八十年史』（1960年、同会）

幕府海軍士官鈴木録之助と昌光丸沈没事件

江原素六は、自らの生い立ちについて記した自伝を幾つかの書籍・雑誌に何度も掲載した。多くは内容的にほぼ同じであるが、若干の違いが見られることもあるので、原稿を求められ提出する際に、あえて別バージョンを用意したのかも知れない。たとえば「鈴木六三郎」（本当は録之助のこと）という人物について言及しているものは、雑誌『活青年』第二巻第三号（一九一一年三月、中央青年会）に掲載された「江原素六翁自叙伝」だけではないかと思われる。まずは、その部分を引用してみよう。

第三余の康福なる記憶の一、余の生れたる所は戸数凡そ五十戸余ありしが前にも陳べし如く其うちにて机のある家は、僅々たる者にして、少しく離れたる所に、鈴木六三郎といふ人あり郷党の人、之を愛人として敬して遠く者なりしが、此の対馬問題の時、大颯風に遭ひ同港に於て軍艦と共に沈没せしが、余は其人に深く愛せられしことは、今も尚ほ忘るゝ能はず。

右の引用文からは、江戸角筈五十人町（現東京都新宿区）にあった江原家の近所に鈴木が住んでいたこと、近隣の人々からは愛人と見られていたこと、洋学を学び幕府海軍士官になったこと、対馬に派遣された際、同地で軍艦が沈没し亡くなったことなどがわかる。江原家と鈴木家がすぐ近くに位置していたことは、素六の父「江原帯刀」と「鈴木録之助」の名前が入った江戸切絵図からも裏付けられる（嘉永四年『内藤新宿新屋敷辺之図』、『沼津市明治史料館通信』第九〇号にも写真掲載）。微禄の幕臣ばかりが集まった五十人町には、自宅に机がある家はわずかで、教育環境も悪かったらしい。少年時代のことなのであるう、ご近所だった鈴木から可愛がられたとも記すが、ともに学問好きだった二人は、年齢の差を超えて交流したのであろう。江原は「録之助」を「六三郎」と間違えて記憶していたようであるが、鈴木録之助については以下のような事実が他の文献等から判明する。

鈴木は軍艦操練所で学んだと思われ、小普請明支配もしくは小普請組・岡田将監支配から軍艦操練教授方手伝出役を経て（国立公文書館所蔵「御軍艦操練所同等之留」）、文久元年（一八六一）七月一二日富士見御宝蔵番格御軍艦組になった（『続徳川実紀』第四篇）。同年一二月から翌年三月にかけて運用方として咸臨丸に乗艦し、領有権主張の前提となる調査のため小笠原諸島に派遣されたこともあった。そして、江原も記しているように、文久三年（一八六三）六月

から対馬藩主宗義達を京都から藩地へ送るため（『改訂対馬島誌』、一九四〇年）、昌光丸に乗船して対馬へ出張したものの、七月三日、停泊していた同地の府中港において難船により事故死した。この事件については、何人かの人物が記録を残しており、たとえば軍艦奉行木村芥舟は「昌光丸去三日於対州沈没之旨、今日御用状来候よし、矢田堀を申越、愍然、鈴木録大工一人水夫一人溺亡、其余者得免」（七月晦日条、『木村撰津守喜毅日記』、一九七七年、塙書房）と日記に認めた。

鈴木死亡時の状況は、当時軍艦奉行並の任にあった勝海舟の日記や佐藤政養（与之助）の海舟宛書簡が詳しい。それによれば、乗組員の多くが上陸し、船には鈴木のほか、高山隼之助・近藤馬之助・鈴木清三郎・森本幸作ら士官五名と水夫・火焚らが残っていたところ、にわかには襲来した激しい台風のため錠の鎖なども切断され、船は波止場へと吹き寄せられてしまった。乗っていた人々は余儀なく陸上へ飛び移ったが、鈴木は誤って海に転落してしまい、船と岸壁の間に挟まれ落命した。水夫と火焚も各一名が死亡した。そして、佐藤は「不慮之変事、奉驚入候」「残念之事に御座候」「長歎仕候」などと記す（『海舟日記』八月七日条、『勝海舟全集』18、一九七二年、勁草書房、七月二五日付海舟宛佐藤書簡、『勝海舟全集』別巻「来簡と資料」、一九九四年、講談社）。

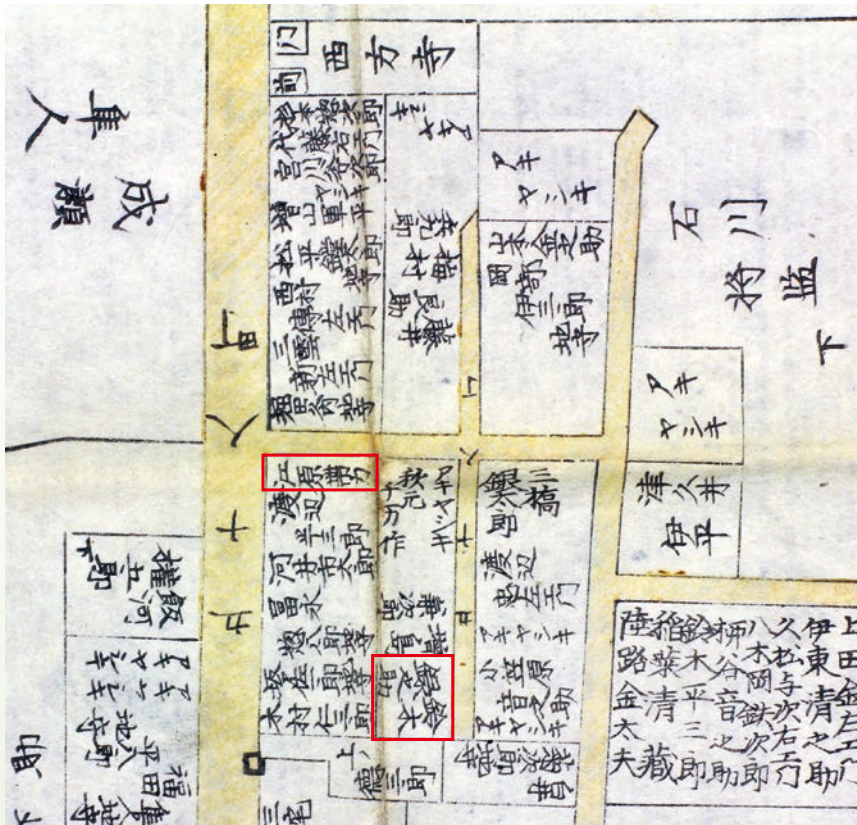
昌光丸沈没が幕府海軍の中では大事件だったことがわかる。同艦は、原名をナンキンといい、一八六〇年イギリス製、八一トンの蒸気船であり、四万ドル余の価格で幕府が購入したものであった（『海軍歴史』、『勝海舟全集』13、一九七四年、勁草書房）。沈没の二ヶ月ほど前、將軍徳川家茂が順動丸に乗り摂海視察を行った際は、昌光丸も同伴をし、乗組員の録之助らにも褒美が下された（『海舟日記』五月八日条）。対馬派遣は当初、朝鮮事情の探索を目的に勝海舟が指令されたもので、順動丸と二艦で行くはずだったが、將軍の江戸帰還に順動丸が使われることになり、また海舟の出張も取り消されたといういきさつがある。

江原は海軍ではなかったが、鈴木との交友関係がどれほど続いていたのかはわからない。事故当時は講武所砲術教授方であり、二二歳だった。録之助没後、同年一月四日、鈴木家は足高をそのまま支給されるという厚遇で実子惣領の彦太郎が継いだ（『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第十一巻）。維新後になると、同家は遠州相良に二等勤番組として移住したが、当時の当主は甚内とい、明治四年（一八七一）時点で一七歳の少年だった。甚内の履歴明細短冊には、「元高式拾俵式人扶持」「世扶持五人扶持」「祖父鈴木龍之助死宮内卿殿近習番介相勤申候」「父鈴木録之助死小十人格御軍艦組相勤申候」などと記される（『牧之原市相良史料館所蔵「遠江国相良勤番組士族名簿」』）。甚内は彦太郎の改名であろう。静岡藩において江原が鈴木の子孫の消息を知っていたか否かはわからない。鈴木甚内のその後についても不明である。



嘉永4年(1851)江戸切絵図「内藤新宿新屋敷辺之圖」
(当館蔵)

赤枠部分を拡大



「江原帯刀」と「鈴木録之助」の住まいが近所だったことがわかる。

実は、江原が沼津で同僚となった塚本明毅(沼津兵学校一等教授方)は、昌光丸沈没時の「頭取代乗組」(事実上の艦長、二月から拜命)であり、上陸していたため助かったのだ(塚本の履歴は拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成」『沼津市博物館紀要』22)。鈴木と塚本は小笠原諸島派遣でもいっしょだった。江原と塚本は、共通の知人である鈴木について語り合う機会もあったのかもしれない。

ちなみに同じ沈没事故に巻き込まれながら、生き残った高山隼之助(静岡藩海軍学校一等学校役・運送方一等)、近藤格(馬之助・主馬、箱館戦争では回天乗組員として宮古湾海戦にも参加、海軍機関大佐)、鈴木忠朝(清三郎、箱館戦争参加、海軍兵学寮兵学中助教)、森本弘策(箱館戦争で千代田形船将、通信省官吏)らは、その後の歴史に名を残した。録之助も存命であれば、「海の男」としてそれなりの活躍を続けたであろう。

(樋口雄彦)

館外展示のお知らせ

明治史料館では毎年、沼津信用金庫本店(大手町)の「ぬましんストリートギャラリー」にて館蔵資料展を開催しています。18回目となる今年は9月2日(木)から10月14日(木)まで、「狩野川」をテーマに開催します。

時代を超えて沼津のまちを流れる狩野川は、この地で暮らす人々に潤いと恵みをもたらしてきました。人々はその川姿を絵図や絵葉書、写真や絵画など様々なかたちで表現しており、当館には各時代の狩野川の様子を伝える資料が多くあります。本展では、狩野川の自然と人の暮らしとが織りなす沼津のすがたを、目にも楽しい資料を通じて紹介します。



昭和18年(1943)頃の永代橋
欄干に片仮名の「ヌ」と松葉を組み合わせた沼津の市章が入り、おしゃれな街灯も設置されています。



絵葉書 スケッチぬまつ
「狩野川の花火」
沼津市出身の画家である志賀旦山氏の作品を、絵葉書に仕立てたものの一枚です。

永代橋下の魚市場 中野勇雄氏撮影

沼津港が整備される前、昭和13年(1938)6月頃に撮影された写真です。永代橋付近の狩野川右岸が魚市場として利用されていました。



昨今、沼津の夏の風物詩である狩野川花火大会の中止をはじめ、川沿いに人々が集うことが難しい状況が続いています。平穏な日常が戻り、狩野川周辺が再び賑わいをみせることを願い、本展を開催します。展示を通じて狩野川の新たな一面を見つけていただくと幸いです。

催しもの参加者募集

高校生のための1日学芸員体験講座

日時 8月5日(木) 10時~15時
会場 沼津市明治史料館
内容 「博物館」と「学芸員」についての講義、館内見学、資料の取り扱いなどの実技
対象 市内在住または在学の高校生
定員 10人(先着)
参加費 無料
持ち物 筆記用具、飲み物、昼食
申込み 7月22日(木)~8月4日(水)
9時から16時30分に直接または電話で



平和を考える戦争史跡めぐり

日時 8月9日(休)、11日(水) 雨天中止
①9時~12時 ②13時~16時
内容 海軍技術研究所跡、御成橋被弾跡などをバスで回ります。
対象 市内在住・在学の小学4~6年生とその保護者
定員 各回5組10人(抽選)
参加費 保険料 1人24円、資料代(希望者) 1冊300円
持ち物 筆記用具、飲み物、タオル、帽子
申込み 希望日時、参加者の氏名(ふりがな)、参加当日の年齢(子は学校名・学年)、性別、住所、連絡先を明記して直接、電話、FAX、メールで。
7月28日(水)16時30分(必着)

聞いて・見て・考えよう わたしたちが住むまちの戦争のこと

日時 8月12日(木) 9時30分~12時
会場 沼津市明治史料館ほか
内容 戦争体験者による講話、弾薬庫跡見学(雨天時は展示解説)、すいとん試食
対象 市内在住・在学の小学4~6年生
定員 10人(抽選)
参加費 保険料 1人24円
持ち物 筆記用具、飲み物、タオル、帽子
申込み 参加者の氏名(ふりがな)、学校名、参加当日の年齢、性別、住所、連絡先を明記して直接、電話、FAX、メールで。
7月28日(水)16時30分必着



古文書解読入門講座

日時 9月4日~10月2日の土曜日(全5回)
9時30分~11時30分
会場 沼津市明治史料館2階講座室
内容 郷土の資料をテキストに、古文書の読み方を学びます。
対象 初めて古文書に触れる方
定員 30人(先着)
参加費 無料
持ち物 筆記用具、くずし字辞典(持っている方)
申込み 7月22日(木)から9月3日(金)
9時から16時30分、直接または電話で



沼津市明治史料館通信 第146号

令和3年7月25日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055-923-3335
FAX 055-925-3018

印刷 みどり美術印刷株式会社

江原学習作品展

~子どもたちが見た江原素六~ 開催中

「江原学習」とは、小学校の総合学習の一つとして地域の偉人を知る学習です。明治史料館のある金岡地区では、4年生になると江原素六先生について調べます。今年も金岡・沢田・門池・開北小学校の4校が個人やグループで様々な作品にまとめ上げました。子どもたちの素直な目を見た江原素六先生像が浮かび上がります。ぜひご覧ください。



訂正とお詫び

連載記事「江原素六とその周辺」の番号に誤りがありました。
・通巻143号(2020年10月)3頁 江原素六とその周辺58→59
・通巻144号(2020年1月)2頁 江原素六とその周辺59→60の誤りでした。
訂正してお詫び申し上げます。